

逆流性腎症と慢性腎盂腎炎の進行阻止に関する研究

—ま と め—

小児腎疾患の進行阻止に関する研究

牧 淳

班研究として、小児期の逆流性腎症、慢性腎盂腎炎、ならびに慢性腎機能低下例についての全国的アンケート調査を実施した。これら疾患の大多数の発見が乳幼児であり、また、一般検尿での発見が困難であるので、検診の乳幼児期への拡充と、超音波診断法の導入など検診方法の検討の必要性が示された。

牧班員は、逆流性腎症の発病機序として、組織障害性が強い特定クローン株の尿路感染症惹起性大腸菌および Tamm-Horsfall glycoprotein (THGP) の役割、ならびに進展機序として尿中の free light chain と THGP との非免疫的結合による尿細管内閉塞に注目した検討成績を報告した。

小林班員は、ラット 5/6 摘出腎および臨床例における腎過酸化脂質量を測定し、過酸化脂質の測定が腎障害、とくに尿細管障害を知る指標となることを報告した。

飯高班員は、S-D 雄ラットを用い、外科用接着剤により尿管・膀胱移行部の機能障害を惹起し、THGP の間質への漏出と、1 例ではあるが巣状分節状硬化 (FGS) 病変を認め、また、先天性片腎欠損ラットの 1 例に FGS 病変が傍髄部優位に認められたことを報告した。

滝班員は、スポット尿中の電解質、溶質、酵素、蛋白など各種成分濃度比を比較検討し、これらの検査値が簡易

な腎機能評価法、ひいては腎障害の早期発見法としての有用性を報告した。

富澤班員は、逆相カラムを用いた HPLC 法で尿蛋白を分析し、 α_1 -acid glycoprotein (α_1 -AGP) と human serum albumin (HSA) の面積比が上部と下部の尿路感染症の鑑別に有用な指標となることを報告した。

小板橋班員は、特発性ネフローゼ症候群の血清および尿中アルブミンの荷電状態を等電点電気泳動法で分析し、尿中アルブミンの発現機序について報告した。

武田班員は、乳児期尿路感染例につき膀胱尿管逆流現象 (VUR) や腎内瘢痕の有無を検討した結果、発熱患児に対しては、不可逆的な腎障害を防ぐために、VUR や瘢痕の有無を検索する必要性を強調した。

矢崎班員は、逆流防止術が施行された逆流性腎症例と VUR 症例に DMSA による定量的腎シンチグラムを施行し、両者とも約 1 年後に DMSA 摂取率の有意の低下を認め、また、高度低下例には微量アルブミンの増加を認めるなどの病態の進行を示唆する結果を得て、可及的早期に逆流防止術を施行する必要性を強調した。

白髪班員は、閉塞性 (逆流性) 尿路障害例に対する対策として清潔間欠的自己導尿法 (CIC) が腎機能障害・高血圧・尿路感染症を予防するうえで有用であり、CIC 療法を早期から教育導入

近畿大学医学部小児科学教室

Sunao Maki

Dept. of Pediatr., Kinki Univ. School of Medicine

する必要性を強調した。

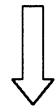
生駒班員は、逆流防止術の意義を検討した。逆流防止術により腎盂腎炎の発症は有効に防止するが、腎の瘢痕の進展は15%にみられた。しかし、術後2年以降での進展は2%に過ぎないので術前検査で瘢痕の見逃しが少ない

ことが推定された。また、逆流防止術による腎成長の catch up は期待し難いが、2歳未満の幼若乳幼児施行例には catch up の傾向がみられるので、VUR をできるだけ早期に発見して逆流防止術を行う必要性を強調した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



逆流性腎症と慢性腎盂腎炎の進行阻止に関する研究

- まとめ -

小児腎疾患の進行阻止に関する研究

牧淳

班研究として、小児期の逆流性腎症、慢性腎盂腎炎、ならびに慢性腎機能低下例についての全国的アンケート調査を実施した。これら疾患の大多数の発見が乳幼児であり、また、一般検尿での発見が困難であるので、検診の乳幼児期への拡充と、超音波診断法の導入など検診方法の検討の必要性が示された。

牧班員は、逆流性腎症の発病機序として、組織障害性が強い特定クローン株の尿路感染症惹起性大腸菌および Tamm-Horsfall glycoprotein (THGP) の役割、ならびに進展機序として尿中の free light chain と THGP との非免疫的結合による尿細管内閉塞に注目した検討成績を報告した。

小林班員は、ラット 5/6 摘出腎および臨床例における腎過酸化脂質量を測定し、過酸化脂質の測定が腎障害、とくに尿細管障害を知る指標となることを報告した。

飯高班員は、S-D 雄ラットを用い、外科用接着剤により尿管・膀胱移行部の機能障害を惹起し、THGP の間質への漏出と、1 例ではあるが巣状分節状硬化 (FGS) 病変を認め、また、先天性片腎欠損ラットの 1 例に FGS 病変が傍髄部優位に認められたことを報告した。

滝班員は、スポット尿中の電解質、溶質、酵素、蛋白など各種成分濃度比を比較検討し、これらの検査値が簡易な腎機能評価法、ひいては腎障害の早期発見法としての有用性を報告した。

富澤班員は、逆相カラムを用いた HPLC 法で尿蛋白を分析し、1-acid glycoprotein (1-AGP) と human serum albumin (HSA) の面積比が上部と下部の尿路感染症の鑑別に有用な指標となることを報告した。

小坂橋班員は、特発性ネフローゼ症候群の血清および尿中アルブミンの荷電状態を等電点電気泳動法で分析し、尿中アルブミンの発現機序について報告した。

武田班員は、乳児期尿路感染例につき膀胱尿管逆流現象 (VUR) や腎内瘢痕の有無を検討した結果、発熱患児に対しては、不可逆的な腎障害を防ぐために、VUR や瘢痕の有無を検索する必要性を強調した。

矢崎班員は、逆流防止術が施行された逆流性腎症例と VUR 症例に DMSA による定量的腎シンチグラムを施行し、両者とも約 1 年後に DMSA 摂取率の有意の低下を認め、また、高度低下例には微量アルブミンの増加を認めるなどの病態の進行を示唆する結果を得て、可及的早期に逆流防止術を施行する必要性を強調した。

白髪班員は,閉塞性(逆流性)尿路障害例に対する対策として清潔間欠的自己導尿法(CIC)が腎機能障害・高血圧・尿路感染症を予防するうえで有用であり,CIC療法を早期から教育導入する必要性を強調した。

生駒班員は,逆流防止術の意義を検討した。逆流防止術により腎盂腎炎の発症は有効に防止するが,腎の瘢痕の進展は15%にみられた。しかし,術後2年以降での進展は2%に過ぎないので術前検査で瘢痕の見逃しが少くないことが推定された。また,逆流防止術による腎成長のcatch upは期待し難いが,2歳未満の幼若乳幼児施行例にはcatch upの傾向がみられるので,VURをできるだけ早期に発見して逆流防止術を行う必要性を強調した。